

ぼんでゆれ！

ゆるポメラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

みなさん、こんヴァンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ばんでゆれのお時間です。ばんでゆれは、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴァンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！

急に変わった番組をするなど？

そんな事をいう奴は、チョップだ！

※注意事項

1. この作品はラブライブ！とのクロスオーバーになります（苦手な方は注意!!）

2. ばみゆてれ風にしています。

3. 会話しているだけの作品になります（ここ超大事!!）

4. 作者はバンドリ、スクフェス、ヴァンガードをやっています（大事なので言っておく）

5. 『月の少年の休日日記』で起こる出来事等も含まれています。

6. ゲストは度々変わります（偶に誰かが乱入してくるかも）

7. 更新速度は速かったり遅かったりです。

8. シリアスや鬱な展開は……………ある訳がない!!（ないよ……………？ 多分……………）

9. タグにも書いてありますがラジオ番組風です（それ以上でもそれ以下でもない）

10. 基本的に短い文章になるかも（予告も含めて）

11. メタ発言もあるかも。

12. オリジナルカードの説明や今日のカードをお送りするかも
（主人公とセレナが）

13. 過度な期待はしないでください（某3姉妹の末っ子発言）

上記の注意事項を守る方のみ、

作品をお読みください。

感想や評価、お待ちしております。

目次

第1話	えっ！メガラニカを知らない？	1
第2話	湊友希那	4
第3話	氷川紗夜	7
第4話	今井リサ	10
第5話	宇田川あこ	14
第6話	白金燐子	17
第7話	Roseliaの皆さん	21
第8話	第1章と2章の振り返りと第3章の予告	26

第1話 えっ！ メガラニカを知らない？

「みなさんこんヴァンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ぼんでゆれのお時間です。ぼんでゆれば、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴァンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！ ユーリ、こんな感じでもいいかな？」

「…前もセレナが1人で司会をやってたんだから、僕は問題ないと思うけど。あ、どうも。水無月悠里です」

「今日はユーリと、とある場所でお送りするぞ！」

「…とある場所と言っても、ライブハウスの傍にあるカフェの一角で……………だけどね？ 何処のとは言わないけど」

「プレイバシーもあるからな。その辺は安心していい」

「…安心できるかなあ？ セレナ、お手紙が来てるよ。えーと……………メガラニカって何？ だって」

「えっ！ メガラニカを知らない？」

「……………みたいだね（この質問はマズかったかな？ かな？）」

「てことは……………まさか、みんな……………惑星クレイも知らないのか!？」

「確かによく考えて見たら……………どうなんだろ？」

「じゃあ……………仕方ない。私とユーリが0から500まで説明してあげようー」

「……………そうだね。尺、足りるかな？」

「ユーリ？ どうしてそんなに元気がないんだ？」

「なんでもない」

「そっか。それじゃあ改めて。地球とよく似た星、それが惑星クレイだ。そこには、私のようなマーメイドや、空を飛ぶドラゴンまで。

様々な住人が6つの国家に分かれて存在している。ドラゴンの軍隊が支配する『ドラゴンエンパイア』」

「かげろう、たちかぜ、ぬばたま、むらくも……………この4つが属してるのがこれ」

「動物や植物達が共生する『ズー』」

「…ネオネクタールが主にこれ」
「魔術師や悪魔が潜む『ダークゾーン』……」
「ウルルとエルルが属してるギアクロニクルもこっちになるんだよ」
「聖なる騎士や預言者達が集う『ユナイテッドサンクチュアリ』」
「…ロイヤルパラディンやシャドウパラディンが代表的」
「宇宙人や異界の生命体が生息する『スターゲート』」
「その説明だと、ノヴァグラップラーはどうなるんだ説。あ、でも……
種族がエイリアンもいるから間違いじゃないか」
「そして、ありとあらゆる生命を抱く広大な海を領土とする我らが『メ
ガラニカ』！ フツ……決まった……!!」
「……セレナがこれまでにないくらいドヤ顔してる件」
「私の住んでいる村は、海底にあるんだが……別の海域には、お化けの
海賊もいるらしい。海は広いな！」
「…そうだねー、広いよねー……」
「とにかく！ 多くの者が暮らしているという事だ！ この惑星クレ
イの住人の力を借りて、ユーリのように地球に住む住人が闘うのが、
ヴァンガードだ!!」
「…ちなみにヴァンガードは、『先導者』、または『導く者』という意味。
ここ一応、テストに出るよ」
「そういう事だ。時間が余ってしまったけど……何話す？」
「それ以前にセレナ？ この番組って続くの？」
「ゲスト次第じゃないか？ 一応、チラシは私が配っておいたからな。
えっへん！」
「……いつの間に。何枚配ったのさ？」
「んーと、20枚近くだったかな……多分。エルルちゃんも手伝って
くれたんだぞ」
「エルルも関わってんの!? 初耳なんだけど!」
「おっとそろそろ時間だな。ユーリ、終わりの合図を一緒にやりたい
のだが……」
「あーはいはい。それじゃあ……」
「サーの……」

「次回は来るか来ないか分からないゲストを招いて、番組をお送りするので必ず観るように。それではまた会いましょうー」

第2話 湊友希那

「みなさんこんヴァンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ぼんでゆれのお時間です。ぼんでゆれは、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴァンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！」

「…みなさんこんばんは。セレナに番組を一緒にやってと頼まれた水無月悠里です」

「…遠回しにユーリに不満を言われた気がするが…：…気のせいかな？」

「…不満だったら堂々と乗り気じゃないって僕は言うし。今は軽い前置き挨拶」

「そうか…：…てつきりユーリに嫌われてしまったのかと焦ったが…：…おっと。このまま進行しても構わないか？」

「…セレナのペースでいいよ」

「それじゃあ前回のやさしいを。前はみんなに惑星クレイと国家について説明したから、今回はゲストを招いて質問や軽いトークをするぞ」

「…：…ほんとにゲスト招くんだ…：…誰が来るのか僕は聞かされてないけど」

「きつとユーリもびっくりするぞ？ それではゲストの方ー、こちらにどうぞぞー」

「…よろしく…：…」

「しかも第1回目のゲストが友希那ちゃんって!？」

「ふっふっふっ。ユーリ、びっくりした？」

「…：…別の意味でびっくり」

「ところで私はこの後どうすればいいのかしら？」

「おつとと。それじゃあユキナはゲストだから、真ん中に座ってくれないか？」

「分かったわ」

「それでは改めて、ゲストさんに自己紹介をしてもらいましょう」

「…：…湊友希那。Roseliaでボーカルをしているわ。どうぞよ

ろしく。こんな感じでいいかしら?」

「充分だ。それじゃあユキナには、お手紙が来てるから、その内容に答えてくれないか?」

「……早い話、友希那ちゃんに質問コーナー」

「それに答えればいいのね? 分かったわ」

「それと必ずしも全部の質問に答えなくてもOKだ。答えにくい質問があつたら、答えなくても大丈夫だ。それじゃユーリ、上手く手紙が混ざるようにシャッフルしてくれ」

「…はいはい……つと……こんなもんかな?」

「それじゃあ……この手紙だ。『好きな食べ物と嫌いな食べ物はなんですか?』だそうだ。先ずは好きな食べ物は?」

「そうね……はちみつティーとリサと悠里が作ったクッキーかしら」

「…僕が作るクッキーって……リサちゃんのはかなり見劣りすると思っただけど?」

「何を言ってるの? 悠里が作るクッキーはRoselia内でもかなり評判がいいのよ。リサでさえ、作り方を教えて欲しいってぼやくんだから」

「ユーリが作るクッキーは絶品だぞ。普段、料理をしない女の子が料理に目覚めるくらいのも美味しさだからな!」

「…そんな大袈裟な……まあ美味しいって言ってもらえるだけいいか……」

「じゃあユキナ、次に嫌いな食べ物は何?」

「苦い物はダメね。特にゴーヤ。あれは今でもダメだわ……」

「そうなのか。ん? 苦い物というと……コーヒーも?」

「コーヒーは砂糖を入れれば飲めるわ。ただブラックがダメなだけ……」

「私も偶にコーヒーを飲むが、最初はブラックで飲んで、その後はハチミツを入れて飲んでるぞ。意外と悪くない組み合わせだ!」

「それは興味深いわね。家に帰ったら試してみるわ」

「…ハチミツコーヒーを作る際は、スプーンにハチミツを2.5……つまり2回半入れるのが僕個人のオススメ。飲み終わった後に、カツ

プの底に僅かに残ったコーヒーとハチミツにハツカ飴を入れて10回混ぜた後、2分放置すると、ほろ苦い甘さのハツカ飴の完成……」
「おおっ!! ハツカ飴が苦手な人でも克服できる味の飴が作れるのか!! これは私も試してみなければ……それじゃあ次の質問を……っ
! しまった! もう時間がない!」
「……えっ!? もう!? まだ友希那ちゃんに質問、1つしかしてないよ!」

「仕方ない。ユキナへの質問は、また別の機会に回そう。ユキナ、慌ただしくなってしまうて申し訳ない……」

「構わないわ。私もそれなりに楽しめたから」

「ユーリ、前回と同じように一緒に終わりの合図をやるぞ」

「……せっかくだから、友希那ちゃんにも一緒にやってもらおうよ。ゲストだし」

「それは名案だ! その方が番組も盛り上がる」

「……でも何て言えばいいの? 私、終わりの合図なんて知らないわよ……?」

「……この紙に書いてある文を友希那ちゃんが僕とセレナの合図で一緒に言えばいいんだよ」

「……この文を読めばいいのね? 分かったわ」

「セレナ、準備は?」

「私はいつでも大丈夫だ!」

「「せーの……」」

「「次回も来るか来ないか分からないゲストを招いて、番組をお送りするので必ず観るように。それではまた会いましょう」」

第3話 氷川紗夜

「みなさんこんヴァンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ぼんでゆれのお時間です。ぼんでゆれは、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴァンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！」

「…みなさんこんヴァンガ。第3回だし、挨拶も変えてもいいかなと個人的に思い始めた水無月悠里です」

「早くも番組も放送3回目か。これから招き入れるゲストの回も数えると、まだ2回目なんだ」

「…あ、そっか。全体放送としては、3回目だけど、ゲスト回としては2回目になるのか……納得、納得」

「さて。今日のゲストは、貴重な空き時間を作っていたから、私達でゲストに、お茶請けを用意しておいたぞ！」

「……テーブルにフライドポテトがある時点で、誰がゲストかは予想はついてるけど……まあいっか。ではゲストの方、どうぞ」

「おお！ ユーリが珍しく私の代わりに仕切ってくれてるぞ！」

「失礼します」

「本日、第2回目のゲストは、氷川^{ひかわさよ}紗夜ちゃんです。紗夜ちゃん、今日はよろしくね？」

「はい。こちらこそ、よろしくお願ひします。あ……フライポテト……………」

「僕とセレナで作った3種盛りフライドポテト。食べて、食べて」

「そ、そうですか。い、いただきます……………」

「……………（食べる姿が、リスか、ハムスターみたい…………）」

「紗夜ちゃんが、美味しそうにフライドポテトを食べてるので僕が代わりに軽い紹介を。紗夜ちゃんは、Roseliaのギター担当で、友希那ちゃんが信頼するクールビューティーギタリスト」

「な、なんですか!?! その紹介は!?!」

「…………… ほぼそのままの事を僕、説明したんだけど……………どこかおかしかった?」

「い、いえ……そういう訳ではないんですが……」

「そつか。じゃあ紗夜ちゃんには、質問のお手紙に答えてもらってもいいかな？ もちろん、答えたくない質問には、無理に答えなくてもいいから」

「分かりました」

「セレナー。紗夜ちゃん宛の手紙、何通届いてる？」

「前回のユキナと同じく、凄まじい量だぞ。この中から私が選んでもいいか？」

「友希那ちゃんの時も僕がそんな感じで選んだから、それでいいよ」

「そうか。えつと……それじゃあ……これだ！」

「……えつと……『自分は学校で生徒会で活動しています。風紀委員の活動もやっているのですが、校舎の見回りが中々効率良くできません。何か良い方をご教授できれば幸いです』だってさ？」

「見回りですか……」

「私も手紙を読む限りだと相当悩んでるみたいだぞ、送ってきた人の苦勞が窺えるな……」

「そうですね……私の場合、生徒会室から出て、限られた時間内で校舎内を回ります。事前に校舎の敷地を覚えておくのがいいでしょう。最終的に、生徒会室までに辿り着くようにルートを決めておけば、あの程度は効率良くできると思いますよ」

「……そつか。その手があったか。今度、学校集会で提言してみよう」

「藍音学院は広いからな。下手したら見回りで半日近く使っちゃうから、サヨの案は効率的だと思うぞ」

「大袈裟では？……ところで悠里さんが通ってる藍音学院ってどのくらい広いんですか？ 見回りで半日掛かると聞きましたけど……」

「そうだなあ……言葉にするともっと大袈裟になるけど、昇降口がある1階がキッチンカーが余裕で通れるくらい……？」

「広すぎですよ!？」

「うーん……機会があれば、紗夜ちゃんにその目で確かめてもらいたいんだけど……」

「っ！ ユーリ！ 大変だ！ もう時間がない！」

「…また前回と同じ流れか。紗夜ちゃん、悪いけど……」

「終わりの合図を一緒にやるんですね？　そこは湊さんに聞いています」

「…それなら……まあ……安心かな？　という事でセレナー？」

「私はいつでも大丈夫だ！」

「セーの……」

「…次回も来るか来ないか分からないゲストを招いて、番組をお送りするので必ず観るように。それではまた会いましょう」

第4話 今井リサ

「みなさんこんヴァンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ぼんでゆれのお時間です。ぼんでゆれは、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴァンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！」

「…みなさんこんヴァンガ。この番組の進行もちよつとは慣れてきたかなくと、個人的に思い始めた水無月悠里です」

「ゲスト回も今回で3回目か。早いもんだな」

「…けど、セレナ？ まだ3回目……………」

「そう。まだ3回目……………」

「…ふふふふ……………」

「こほん。今日のゲストは、とあるベースリストだ！」

「…それ、今日のゲストのヒントになってるのかな？ かな？ 怪しいけど……………まあでも、視聴者……………この番組の場合はリスナーでいいのかな？ まあ前回を知ってる方なら、今回のゲストが誰だか予想がつくかもね」

「それでは、ゲストの方、どうぞー」

「失礼しまーす☆」

「本日、第3回目のゲストは、今井^{いまい}リサちゃんです。今日はよろしくね？」

「よろしく☆ なんか悠里が司会を手伝ってるって珍しいね？」

「…セレナの頼みだし、やってもいいかなって」

「…ユーリに真顔で言われるとなんか照れるぞ。さて。リサの自己紹介は私がしよう！ リサは、Roseliaのベース担当で、慈愛の女神だ！」

「ちよつと何?! 慈愛の女神って!？」

「? ユーリが、リサちゃんに称号を付けるとしたら、慈愛の女神かなって言ってたってだからだぞ」

「悠里? ちよつとアタシとお話しよつか?」

「…みい、リサちゃんにピッタリな称号だと思っただけだな……………あつ、

それとも慈愛の女神リサエルが良かった?」
「まるでエンジェルフェザーにいそうな名前だな……」
「そういう問題じゃないの! 恥ずかしいじゃん!」
「…リサちゃんにピッタリな可愛い称号なんだけどなあ……」
「……もう! そうやって可愛いって言うのは……やっぱり悠里ズル
い」
「気を取り直して、質問コーナーだ。リサ宛に、質問のお手紙が来てる
から、それに答えてほしい」
「オツケー☆ アタシに質問ってなんだろう……」
「という訳でユーリ。前は私が選んだから、今回はユーリが選んで
くれ」
「……今回も凄い量の手紙だね。じゃあ……これで」
「何々……」部活とかは何かやってるんですか?』か……中々ピンポイ
ントな質問だな……という事で、リサは何かやっているのか?」
「部活かあ……えーっと、アタシはダンス部とテニス部を掛け持ちで
やってるよ」
「……僕、思ったんだけど、部活の他にバイトやRoseliaの練習
もしてるんでしょ? リサちゃん……疲れないの?」
「ん……まあ最初はそういう時も思う時もあったけど、やってて楽
しいから、アタシはそういうのあんまり気にしてないかな」
「……ま、眩しい……リサちゃんが眩しい……やっぱり慈愛の女神の
称号はリサちゃんに相応しいよ」
「私も今の話を聞いてて、なんとなくだが、リサが慈愛の女神の称号を
持つてても違和感がないと思うぞ」
「ちよ、ちよっとー!! 2人してなんなの?!」
「敬意を表して褒めてる」
「そ、それより! ねえ、何か悠里に質問とかの手紙はないの? なん
かアタシだけ恥ずかしい思いをしてる気がする!」
「…何言ってるの。今回のゲストはリサちゃんなんだから、ある訳な
いでしょ。ね、セレナ?」
「ところがどっこい。意外とあるぞ。ユーリ宛の手紙」

「……あるんかい」

「まあでもリサの言う事も一理ある。今回から、ゲストが司会者に逆質問をするコーナーも取り入れてみよう。最もゲストが質問をしたという条件付きだが」

「……まあ……それだったら僕は構わないかな」

「ユーリの許可が下りたところで、リサ、この中から好きな手紙を選んでくれー!」

「ん〜……じゃあ、これ!」

「どれどれ……『今回のゲストさんのご両親はどんな方ですか?』か。この場合は、ユーリから見ても、リサの両親はどんな人かを答えてほしい……なるが、ユーリ、大丈夫か?」

「……まあ問題ないけど」

「あれ? アタシ……もしかして……とんでもないもの引いちゃった……?」

「という訳で、ユーリから見たりリサの両親について。まずは、お母さんは?」

「……リサちゃんのお母さんは、優しくて美人で面倒見がいい人。昔からなんだけど、僕がリサちゃんの家に行く度に、頭を撫でられたり、この前も仕事で疲れてたのかな? ハグされたよ」

「何それ!? 頭などで知ってるけど、ハグしてるのはアタシ初耳だよ!」

「? そうなの? てっきり、リサちゃんも知ってるかと思った……」

「じゃあユーリ、お父さんは?」

「……リサちゃんのお父さん? イケメンでカッコよくてコミュニケーション能力が高くて優しい人。会う度に、キャッチボールしようって言われる。それで何を思ったのか、何か困った事があったら、遠慮なく言ってくれて意味深な事を言われる。例えば娘との結婚とかなって。例えば話が具体的過ぎでビックリしたけど」

「……そ、そうなんだ〜……帰ったら、お父さんとお話かな。お母さんもだけど……」

「っ! ユーリ! 大変だ! もう時間がない!」

「…前回と同じ流れ。リサちゃん、ちなみに……」

「終わりの合図だね？ 友希那と紗夜から聞いているから大丈夫だよ☆」

「…情報伝わるの早い……セレナー？」

「いつでも大丈夫だ！」

「「セーの……」」

「「次回も来るか来ないか分からないゲストを招いて、番組をお送りするので必ず観るように。それではまた会いましょう」」

第5話 宇田川あこ

「みなさんこんヴァンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ぼんでゆれのお時間です。ぼんでゆれは、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴァンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！」

「…みなさんこんヴァンガ。最近、デツキの組み直して夜更かしをしてしまった水無月悠里です」

「ユーリ、大丈夫か？ かなり眠そうだが……」

「顔が視える訳じゃなし大丈夫……だと思う。うん。だってこれラジオみたい番組だし……」

「それならいいが……もし辛くなったら、ちゃんと私に言ってほしい」
「……ん。分かった」

「今日のゲストは、魔王でドラマーだ！」

「最早、ヒントなのか怪しい件……」

「それでは、ゲストの方、どうぞー」

「漆黒の闇より現れし、混沌を司る魔王！ 宇田川あこ、さんじょー！」

ドーン!! いっひっひー、決まったあー！」

「はい。本日、第4回目のゲストは、宇田川あこちゃんです。今日はよろしくね？」

「よろしくー。リサ姉が言ってたけど、ゆうりんが司会を手伝ってるんだね？」

「リサちゃんがあこちゃんになんて説明したかは知らないけど、まあそんな感じ」

「……………」

「あのさせレナ？ そんなジト目で僕を睨んでも可愛いだけだよ？」

「っ!? そ、そそ、そういう手には乗らないぞ！ 早くゲストの自己紹介だー！」

「……全く。それじゃ気を取り直して。あこちゃんは、Roseliaのドラム担当で、オンラインゲームのパーティ仲間です」

「えっと、宇田川あこ！ 中学3年生です！ Roseliaのド

ラマーですっ!!」

「さて、質問コーナーに入ります。ゲストのあこちゃんには……」

「あー！ リサ姉から聞いているよ。手紙に書かれた質問に答えればいいんだよね？」

「そういう事、そういう事。セレナー？ 前は僕が選んだから、今回はセレナが選んでー？」

「……相変わらず手紙の量が多いな……よし、これでいこう！」

「えつと何々……『ゲストさんはデツキを組む時、何を基準にして組んでいますか？』か……前回とは打って変わって質問の基準が変わったなあ……まあこんな感じの質問んだけど……あこちゃん大丈夫？」「んーと、あこはねー、デツキを組む時は、カツコいいを基準にしてるよ。闇の波動がババーンってする感じみたいな」

「……え？ あこちゃん、その基準であのエグイデツキを回してるの？ 僕も人の事あんま言えないけど、ユニットの能力とかも視野に入ってるの？」

「どーなんだろ？ あこ、意識してやった事ないかも」

「…視聴者の皆さん。これが俗に言う『直感でデツキを組むタイプ』の意見です。自分もそうだという人は番組ホームページまで……」

「ユーリ、この番組にホームページなんてあったか？」

「ない。流れて言ってみただけ……」

「ゆうりん、ゆうりん、なんでホームページ作らないのー？」

「……意外と作るの大変なんだよ、ホームページ。というか、ただできえ誰が来るか分からない番組なのに、ホームページを作っているのかと思うんだよね……」

「あこは楽しいし、作ってもいいと思うよ？」

「……セレナ、どうしよう？」

「その件については次回までになんとか考えておこう。ちょうど終わる時間もきた事だし……」

「……うん、そうしよう。あこちゃん、終わりの挨拶とかは聞いている？」

「リサ姉から聞いているから大丈夫だよー！」

「セレナー？」

「私ならいつでも大丈夫だ！」

「セーの……」

「次回も来るか来ないか分からないゲストを招いて、番組をお送りするので必ず観るように。それではまた会いましょう」「」

第6話 白金燐子

「みなさんこんヴァンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ぼんでゆれのお時間です。ぼんでゆれは、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴァンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！」

「…みなさんこんヴァンガ。アシスタントの水無月悠里です」

「ところでユーリ。前回のホームページの件はどうなった？」

「…んー？ 簡易的なのを試しに作ってみた。ただ作るのには本当に大変だったよ……………」

「そっか……………そうそう。ホームページの件なんだが、ユーリと協議した結果、ちよつとずつだが作る事にしてみたぞ！」

「…現在もセレナやギアクロニクルのみんなと試行錯誤しながら制作中です。はい」

「えつと……………今日のゲストだが……………」

「……………(ジー……………)」

「…思いつきり、あそこに隠れてるね。燐子ちゃん、早くこっちにおいでよ」

「う、うん……………」

「はい。本日、第5回目のゲストは、白金燐子ちゃんしろかねりんこです。今日はよろしくね？」

「よ、よろしくお願ひします……………」

「…む、胸があんなに揺れて……………だ、大丈夫だ。私も成長期だし……………」

「セレナ？」

「すまないユーリ……………ゲストの自己紹介を任せたい……………ちよつと立ち直れない……………」

「…ん。分かった。燐子ちゃんはRoseliaのキーボード担当で、衣装担当。オンラインゲームのパーティー仲間、ピアノが上手な僕の幼馴染みです」

「えつと……………白金燐子です。学校では……………図書委員をやっています……………」

「さて、質問コーナーに入ります。ゲストの燐子ちゃんには……」
「あこちゃんから、手紙に書かれた質問に答えればいいって……」

「そういう事。流石あこちゃん、仕事が早い。セレナー？」

「よし！ 質問コーナーだな！ やっぱり手紙はこんなに来てるぞ
！」

「…心なしか前回より多い気が。じゃあ……これかな？ セレナ、進
行よろしく」

「何々……胸が大きくなりません。どうすればいいですか？」か……
私への当てつけか何かか？ リンコ、どうしたらそうなるんだ？」

「えっ!? えっと……」

「…これ軽いセクハラだよ……質問を送ってきた人は女子高生っぽい
けど。てか燐子ちゃん、嫌なら答えなくてもいいからね？」

「その……特別な事は何も……」

「はい。この質問終わり。せっかくだから次の質問いこ。セレナ、い
いでしょ？」

「そうだな。じゃあ次は……これか。何々……『私は胸があまり大き
くありません。友人に胸が大きい子がいるんですが、胸が大きくて羨
ましいと言ったら、逆にそっちが羨ましいよと言われました。これっ
てどういう意味ですか？ ご存知でしたら教えてください』か……こ
れは興味深い質問だな。リンコ、この質問、答えられそうか？」

「さ、参考になるか分からないけど……大丈夫……」

「…じゃあ……燐子ちゃん、この手紙を送ってきたリスナーさんに答
えられそうな範囲でお願い……」

「うん、えっと……まず肩が凝ります」

「なんかよく聞くよね、それ。あと僕が知ってるのは、体育の授業とか
であるマラソン系かな。本当かどうかは分からないけども」

「それは……本当だよ。わたし……走るのはあんまり好きじゃなくて
……」

「そうなのか。というか、なんでユーリがその事を知ってるんだ？」

「…色んな人の表情を見てきたから。まあ……個人差はあるみたいだ
けど、走った時……揺れるじゃん？ その時の……圧力？ いや……」

走ってる人からしたら……引力か。とにかく息苦しさが襲ってくるらしいよ」

「はあ……そうなのか」

「えっと……ゆうりくんの言ってる事は……本当です。わたしもそんな感じというか……」

「他は？」

「ほ、他は……寝る時かな……？」

「？ 寝る時？ あんまり想像がつかないが……」

「……これも知られてない事だけど、燐子ちゃんが言ってるのは、寝る時の体勢だと僕は思う……」

「うん。それ……」

「寝る体勢か。私は仰向けで寝てるぞ！」

「……セレナは寝相も良いし、寝顔も可愛いからね」

「っ!? い、いつ私の寝顔なんて見たんだ!？」

「……さーて。いつだろうね……」

「い、一体……何時だ？ あの時か……？ いやあれは違うし……」

「……話を戻すと、胸が大きい女性が仰向けで寝ると、息苦しさがくるらしいです。なので、横向きで抱き枕か何かで補うといいよ」

「そ、そうなんだ……わたしも似たような事してるよ。お陰で楽になったし……」

「燐子ちゃんのお墨付きらしいので、困った女性の皆さんは是非お試しください……」

「効果は……抜群……です（……言えない。ゆうりくんを模した抱き枕カバーを使ってるなんて……言えない……）」

「っ！ ユーリ！ 大変だ！ もう時間がない！」

「セレナ、ナイスタイミング。燐子ちゃん、終わりの挨拶とかは聞いている……」

「うん、あこちゃんから聞いてるよ」

「セレナー？」

「いつでも大丈夫だ！」

「「セーの……」」

「次回も来るか来ないかわからないゲストを招いて、番組をお送りするので必ず観るように。それではまた会いましょう」「

第7話 Roseliaの皆さん

「みなさんこんヴアンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ぼんでゆれのお時間です。ぼんでゆれは、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴアンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！」

「…みなさんこんヴアンガ。アシスタントの水無月悠里です」

「今回のゲストは、Roseliaのみんなだ！」

「…紹介が雑……………というか、言っちゃったよ。という訳で、ゲストの方々……………っていうか、みんな入って来て」

「…どうも……………」

「失礼します」

「失礼しまーす☆」

「漆黒の闇より現れし、混沌を司る魔王！ 宇田川あこ、さんじょー！」

「ドーン!!」

「よ、よろしくお願ひします……………」

「ふふ。やはり5という数字はいいものだな♪」

「…始まったよ。セレナの癖が……………みんな気にしなくていいから、座っていいよ。ついでに自己紹介してくれると助かる」

「……………分かったわ。湊友希那。Roseliaでボーカルをしているわ。どうぞよろしく」

「氷川紗夜です。Roseliaでギターをしています。よろしくお願ひします」

「2人共、硬いなく。今井リサです。友希那と悠里の幼馴染みで、Roseliaでベースをやってるよ☆」

「宇田川あこ、さんじょー！ Roseliaのドラマーだよ！
ドーン!!」

「し、白金燐子……………です。Roseliaでキーボードを……………しています。ゆうりくんとは……………幼馴染みです」

「…みんな自己紹介ありがとう。セレナ？」

「おっとすまない……………私とした事が……………」

「いいけどさ。今日も質問コーナー？」

「今日はちよつと違うぞ？ こほん。今日は、『銀華竜炎』ぎんがりゆうえんの発売日記念のスペシャルコーナーだ！」

「…それ昨日発売したばっか……1日過ぎてんじゃん……」

「そこは大目に見てくれ。今日は5人の中から、1人に手紙を選んでもらって、それについて答えるコーナーだ！ という訳で……ユキナが選んでくれ！」

「私なのね……じゃあ、これで」

「何々……『初めまして。自分はヴァンガード初心者です。』かげろう”を使ってみたいんですが、無理を言うのは重々承知ですが、低コストで強いデッキを”教授お願いします』か……これって実際どうなんだ？」

「私は”かげろう”は使った事がないから、申し訳ないけど何も言えないわ……」

「けっこう無理難題な質問ですね。予算とかは書いてないんですか？」

「この手紙のリスナーによると、2000円ちよつと……と書いてあるぞ？」

「2000円ちよつとって……うくん、仮に2500円としよつか。

あこ、ドロートリガー版の完全ガードっていくらだったけ？」

「お店によるけど……700円かな？ 値段が落ち着くと、480円くらいだった気がするよ」

「む、難しいんじゃないかな……”かげろう”は人気があるから……どのグレード3を主軸にすればいいのかもあるし……ゆうりくんはどう思う？」

「そうだね……”かげろう”が収録される時って、絶対に手抜き……ハズレユニットが収録される事はあまりないんだよね……正確には、人気の高いクラン全般に言えるけど、鼻真にされるっていうか……リスナーさんのリクエストに答えるなら……」

『オッドネスアード・ドラゴン』

「…このグレード3ユニットを主軸にしたデッキにすればいいと思

う」

「ユーリ、イラストが『アイアンテイル・ドラゴン』に似てて、親近感があるぞー!」

「レアリティは……レアですね」

「ゆうりん、ゆうりん。サブヴァンガードは、どれがいいの?」

「:サブ? これも銀華竜炎に収録されてるユニットだけど……」

『ドラゴンナイト イスハーク』

「これかな」

「えつとく……永続スキルで、自分のターン中、相手のリアガードがないなら自身にパワー+10000。それで起動効果で、カウンターブラスト1枚払うと、相手のリアガードを1枚選んで退却。グレード3の自分の他のリアガードがいるなら、1枚の代わりに2枚選ぶって……意外と強くない?」

「しかも両方、ヴァンガードの時でもリアガードの時でも使えるのね……」

「オッドネスアードーは、アタック時に相手のリアガードがいないと、自身にパワー+5000して、相手は手札からガードする際に、2枚以上でしかガーディアンサークルにコールできない……ですか。完全ガードで例えると、3枚出せと言ってるんですよね? 厄介ですね……」

「:多分2枚共、1枚で60円くらいだと思っうよ? あと個人的な注目カードだと……」

『焦熱の火 ギビル』

「これかな。レアリティはコモンだけど、ブーストしたバトル終了時に自分の手札が4枚以下なら、自身をソウルインして、そのターン中、ヴァンガードにパワー+5000を付与するっていう、明らかにコモんじゃないユニット」

「隠れた実力者という訳か」

「そういう事。隣子ちゃん的にどう思う? このユニット達……」

「カウンターブラストもそんなに使わないし、オッドネスアードーに至っては、条件さえ整えば、ノーコストに近いし……正直言って、レ

アリテイがレアなのが不思議……」

「そうなるとだ。ユーリ、既存のカードで、リスナーが望む、低コストな“かげろう” デツキは作れそうか？」

「…作れるよ。燐子ちゃん、あこちゃん。”かげろう”のユニットを検索するの手伝ってくれない？ 検索ワードは、スタンダード版で」
「うん」

「あこにまっかせてー！」

「できた！」

「はやっ！ まだ10分も経ってないよ!？」

「それじゃ、ユーリ。デツキレシピを公開してくれるか？」

「…ん。デツキ名は……『低コストな2000円ちよつとのかげろう』
……」

☆グレード3 (8枚)

オッドネスアードー・ドラゴン……4枚 (銀華竜炎)

ドラゴンナイト イスハーク……4枚 (銀華竜炎)

☆グレード2 (11枚)

ベリコウスティドラゴン……4枚 (結成! チームQ4)

魔竜導師 サカラ……3枚 (銀華竜炎)

ドラゴニック・バーンアウト……4枚 (救世の光 破滅の理)

☆グレード1 (14枚)

ドラゴندانサー ジョゼ……4枚 (守護者) (The Heroic

c Evolution)

焦熱の火 ギビル……4枚 (銀華竜炎)

ワイバーストライク マンバス……3枚 (The Heroic

Evolution)

リザードソルジャー ラオピア……3枚 (結成! チームQ4)

☆グレード0 (17枚)

リザードソルジャー コンロー……1枚 [FV] (銀華竜炎)

アングリーホーン・ドラゴン……4枚 [☆] (銀華竜炎)

魔竜導師 ラクシャ……4枚 [☆] (銀華竜炎)

トクサファイライト・ドラゴン……4枚【引】（銀華竜炎）

マザーオーブ・ドラゴン……4枚【治】（銀華竜炎）

「…こんな感じかな。どのユニットもレアリティはレアとコモンだから、これで多分、2000円ちよつとの予算で作れると思うよ」

「完全ガードは……スキル持ちですか？」

「うん。普通の完全ガードよりはいいかなと思って。雑に手札交換できると」

「ゆうりん、ラオピアとベリコウステイを採用したのはなんで？」

「この2体のパワーアップ条件が、バトルフェイズ中の退却も含むからかな。ヴァンガードでわざとリアガードにアタックって宣言して、ラオピアかベリコウステイの後列に、マンバスを置いておく。そうなると何が起こるでしょう？」

「あつそつか！ もし相手のリアガードがいなかったら、ガード制限が発動するんだ！」

「多分これ……実際にやられてみないと……分からない……と思う」

「…サカラを採用してる辺り、意地悪ね？」

「そう？ こっちは、ヒットしたらいいなあって感じで……」

「しかもこれ、パワーは9000だけど……ヒットしたら自分と同じ縦列のユニットを退却って……実質ガード強要じゃん。アタシ、対面したくないんだけど……」

「…そりゃね。なるべくカウンターブラストを使わない且つ、銀華竜炎のユニットも入れて構築してみたからね。結果的にこうなっちゃったんだよ……」

「っ！ ユーリ！ 大変だ！ もう時間がない！」

「…時間か。みんな、この番組恒例の準備お願いー。セレナー？」

「いつでも大丈夫だ！」

「「セーの……」」

「「次回も来るか来ないか分からないゲストを招いて、番組をお送りするので必ず観るように。それではまた会いましょう」」」

第8話 第1章と2章の振り返りと第3章の予告

「みなさんこんヴァンガ！ ばみゆてr……………じゃなかった。ぼんでゆれのお時間です。ぼんでゆれは、惑星クレイのメガラニカに住むマーメイド、セレナがお届けするヴァンガードや小ネタを、様々なゲストを招いてお送りする番組です！ 今日……………」

「ただいまー！ って、セレナ!? どうしてあたしの部屋に？」

「お帰りソナタ。ぼんでゆれのオンエアの為に電波の良さそうな部屋を選んだんだ。ちょうどいい。ユーリの代わりにアシスタントをしてくれないか？」

「えっ!? 今? あたしが?」

「今。ソナタが」

「えく…………や、やってみるよ!」

「それは良かった。ユーリは藍音学院の緊急クエストで移動中だからな」

「あ、そっか。一緒に藍音学院に来てたみんなに、お土産も買ってくるって言ってたよね?」

「そうだ。という訳で、ユーリが依頼場所に着くまでの間に、今日のぼんでゆれを済ませてしまおうという訳だ!」

「でもセレナ、今日は何をやるの?」

「今日はこれまでの振り返り回をしようと思う。ぶっちゃけ言うと、ユーリの活躍歴だ!」

「わー! 楽しそう」

「では先ずは…………いつも通り、ライブハウスに行く流れでユーリが昔行ってたカードショップに行く事になる」

「えーつと、確かそこでヴァンガードの大会の受付があるって言ってたよね?」

「その後はなんやかんやで、表向きは『3大高校対抗試合』となってるが、ユーリの中では、『4大高校対抗試合』と察したようだ」

「えーつと、この時はまだどの高校が出るのかはまだ分かってなかったんだよね?」

「みたいだな。エルルちゃん曰く、ユーリが珍しく、しかめっ面をしてたと言っていたぞ」

「確かに珍しいね。何か気になる事でもあったのかな？」

「この時は私もユーリが考え込む理由を考えてみたがさっぱりだったな。この2〜3日後に、ユーリは音ノ木坂学院に遊びに行くぞ」
「ユーリの幼馴染みに会う事になったんだよね。私達と同一年くらい」

「そうだ。ユーリは罪深いぞ！ 色々な意味で」

「それはあたしも思う。寧ろ……これからも色々ありそうな気が……」

「……否定したいが、ソナタが言った通りになりそうで逆に怖いぞ。それからまた2〜3日して、ユーリが通う藍音学院で代表選手が発表されたぞ」

「放課後に理事長室に呼ばれた時だよ。そこで理事長さんから、けっこう長年続いている大会だって分かったんだよ」

「そうだ。しかし長年やってるなら藍音学院はカウントされるのか？」

「それ、ユーリも言ってたよね。藍音学院は一部の人間しか知らない筈だって」

「つとと、話が逸れたな。それから大会まで残り1ヶ月を切って数日後に、藍音学院にユーリの幼馴染み9人が出会っちゃうんだぞ！」

「場がピリピリしてたってユーリも言ってたよね……ってセレナ!!」

「この時にユーリとデートの約束をしたって本当なの!？」

「そ、その件は謝っただろう。今度の休日にデートしようって何気なく言ったら、その……まさかオツケーしてもらえとは思わなくて……だな……」

「セレナが寮に帰って来た時に上機嫌だったから、最初はどうしたのかと思っただけど、ファイトが終わった時にセレナがユーリとデートなんて言うから……」

「正直あの時のフィナちゃんは怖かった」

「あたしも怒ってたんですけど？」

「反省してます……」

「…ソナタだって、昨日の夜中、ユーリの部屋に忍び込んで抱き枕にされてたじゃないか。あまり私と同じ事は言えないと思うぞ……」

「そ、それとこれとは別……なんて言えないね。あの後、あたしとセレナでカノン達に怒られたもんね……」

「ユーリはユーリで、その件についても説明しなきゃいけなくなってしまう。あの後、ユーリに謝ったら、終わった事だからいいと言ってくれたが……」

「気にしちゃうよね……はあ……」

「では。気を取り直して。これは私とユーリの推測だが『4大高校対抗試合』で、藍音学院はカウントされていないと思うんだ」

「?」じゃあ別の学校が参加するって事? 藍音学院を除くと、確定してるのは全部女子校だよな?」

「そうだ。花咲川女子学園、羽丘女子学園、音ノ木坂学院……この3学校は確定だ。そうになると、ユーリ達が通う藍音学院が流れ的に入るかと思うんだが……」

「その可能性は薄いつて事だよな。どこの高校かはユーリとセレナは検討はついてるの?」

「私は全然だ。ただユーリは、これからクエストに行く場所にヒントがあるかもしれないって言ってたぞ。もしかして……依頼者がその代表選手か?」

「どうなんだろう……あ、セレナ。ユーリがそろそろ目的地に着くよって言ってるよ?」

「流石ユーリ。タイミングがいいな! 次回も時間が空いたら、番組をお送りするので必ず観るように。それじゃ! また!」

「じゃあねー♪」